

【火山泥流】

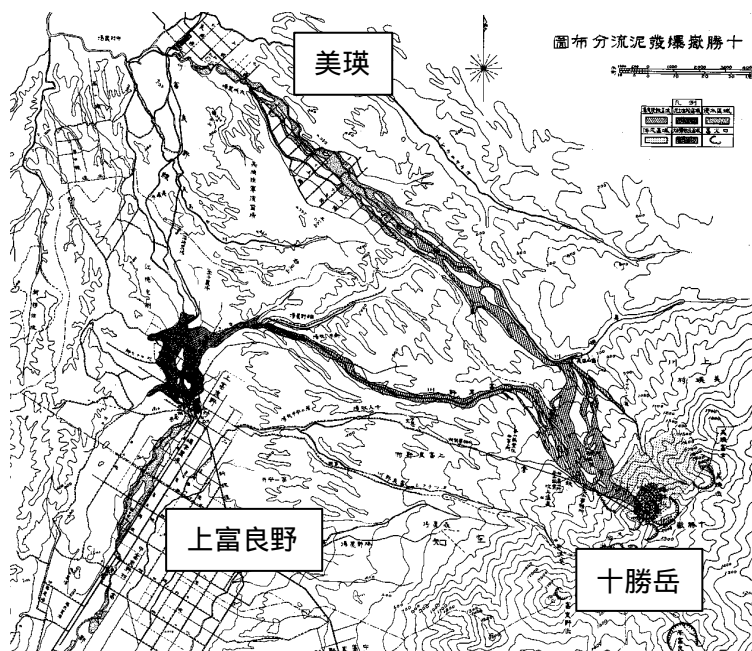
田畑の間をラベンダー色の列車が走り抜ける上富良野町草分地区、現在も盛んに噴煙を上げる十勝岳の火口から 20km も離れたこの場所は、大正 15 年の事件を知らなければ誰もここがその現場だとは気付かないだろう。大岩に刻まれた記念碑や三浦綾子「泥流地帯」の文学碑などがわずかに当時を偲ばせる。1926（大正 15）年 5 月 24 日、十勝岳の噴火により発生した火山泥流は美瑛川と富良野川沿いに流れ下り、死者行方不明 144 人という大きな災害を引き起こした。

火山泥流はラハールとも呼ばれ、火山災害の中でも大きな被害をもたらす現象の 1 つである。発生原因は 火口湖内での噴火による火口縁の決壊、高温噴出物による雪や氷河の急速な融解、火砕流、岩屑なだれの河川への流入などがある。



十勝岳の大正泥流で被害を受けた富良野線

十勝岳の大正泥流は、高温の噴出物が積雪を急速に溶かして発生したものとされているが、もう少し複雑な発生機構であったとの研究もある。1985年南米ネバドデルルス火山の噴火では、火砕流が山頂付近の氷河を溶かして泥流となり50km離れたアルメロの町を襲った。死者行方不明2万数千人と20世紀最大級の火山災害となった。火山泥流は、十勝岳に限らず北海道の火山で積雪期に噴火が起きればどこでも発生する恐れがある。また、火山活動の源から遠く離れた所まで現象が及ぶため被害を大きくするが、地形に沿って谷を流下することから事前により高い所へ避難すれば被害を免れることが可能である。



大正泥流の分布図

上記のように火山活動により直接引き起こされる「一次泥流」のほか、堆積物が大雨などで流されるなど、火山活動が直接の原因ではないものは「二次泥流」と呼ばれるがどちらも危険なことに変わりはない。有珠山周辺では1977～78年の噴火活動がほぼ収まった1978（昭和53）年10月24日、大雨による二次泥流で死傷者を出す大きな被害を受けた。

参考文献

宇井忠英 [編] : 火山噴火と災害、上富良野町：大正15年十勝岳大爆発記録写真集